

# 英訳聖書における進行形の発達

橋 本 功

## 0. ま え が き

進行形の発達の歴史の初期の段階については、F. Mossé の克明な研究がある。<sup>1)</sup> しかし、進行形が著しい発達を遂げた、と言われている近代英語期における、跡付けは、十分に行なわれていないように思われる。本稿の目的は、主として、近代英語期における進行形の発達を、資料の統計的な分析により、跡付けようとするものである。

この目的のための基礎資料として、Wycliffe 以後の英訳聖書を用いることにした。時代を異にししながら、内容が同じである英訳聖書は、この目的に適しているように、思われるからである。

調査した英訳聖書は、次のものである。

(1) *The Gothic and Anglo-Saxon Gospels in Parallel Columns with the Versions of Wycliffe and Tyndale*, ed. J. Bosworth & G. Waring. London (Reeves & Turner), 1888. (Abbrev., *Wycliffe* or *W*)

(2) *The New Testament Translated by William Tyndale 1534 A Reprint of the Edition of 1534 with the Translator's Preface and Notes and the Variants of the Edition of 1525*, ed. N. Hardy Wallis. London (Cambridge U.P.), 1938. (The edition of 1523 is abbreviated to *Tyndale 25* or *T25*, and that of 1534 to *Tyndale 34* or *T34*)

(3) *The Geneva Bible. A Facsimile of the 1560 Edition with*

*an Introduction by Lloyd E. Berry.* London (Wisconsin U. P.), 1969. (Abbrev., *Geneva* or G)

(4) *The Holy Bible. A Facsimile in a Reduced Size of the Authorized Version Published in the Year 1611.* London(Oxford U.P.), 1911. (Abbrev., *Auth.* or A)

(5) *A New and Literal Translation of All the Books of the Old and New Testament; with Notes, Critical and Explanatory by Anthony Purver in Two Volumes* (1764). W. Richardson. Clark. (Abbrev., *Purver* or P)

(6) *The Holy Bible. The Revised Version* (NT 1881). London (Cambridge U.P.), 1929. (Abbrev., *Revised* or R)

(7) *The Bible. A New Translation by James Moffatt* (NT 1913). New York (Harper & Row), 1954. (Abbrev., *Moffatt* or M)

(8) *The New English Bible* (1970). London (Oxford & Cambridge U.P.), 1970. (Abbrev., *New.* or N)

上に挙げた英訳聖書の中で, Wycliffe's Version だけは, 四福音書を, 他は, 新約聖書全部を調査した。

0.1. 一般に, 進行形の形態的特性は, *be + -ing* と定義されている。しかし, 次のような類似構文, 又は, *-ing* を明らかに, 形容詞, あるいは, 形容詞的用法とみなしうるものは, 省く。

### 1. 前置詞

(M) ... it *is owing* to him ... *John* 12, 2.

### 2. 形容詞

(P) ... nothing may *be wanting* to them. *Titus* 11, 5.

(A) ...his raiment *was* white and *glistening*. *Luke* 9, 29.

3. (M) Day by day I *was* beside you in the temple *teaching*.

*Mark* 14, 49.

(M) ... for there *were* many people *coming*...*Mark* 6, 3.

尚, *Be+a-ing* は, 今日の過行形の一つの発達段階を示すものとして, 一応進行形の中に加える。

## 1. *Wycliffe* における進行形

1.1. *Wycliffe's Version* は四福音書しか, 入手できなかったのと, 調査した英訳聖書の内, これだけが, ME 期に属するので, 他の英訳聖書の四福音書の進行形と比較して, *Wycliffe* の進行形の状態を調べることにする。

1.2. 表1は, 各英訳聖書の四福音書に見られる進行形の使用数を表わしている。

表1

Bibles	W	T25	T34	G	A	P	R	M	N
Years	ca. 1389	1525	1534	1560	1611	1764	1881	1913	1970
Number	45	16	15	18	35	118	128	316	373

この表からは, *Wycliffe* の進行形使用数は, 16c. ~17c. の英訳聖書の進行形使用数よりも多い, という不自然な現象がみられる。

1.3. 当時の進行形の使用状態を知るために, *Wycliffe* の時代の人々が書いた手紙, あるいは, official documents を集めた *A Book of London English. 1384-1425*, ed. R. W. Chamber & M. Daunt, London, 1967. (約238頁) を調べると, 8例, 又, *Wycliffe* が書いた散文を集めたとされている *The English Works of Wycliffe*, ed. F. D. Matthew, (E. F. T. S. 34), (約450頁) には, 2例しか, 進行形の例を見つけることができなかった。<sup>2)</sup> 当時の作品については, 上の二つの Texts しか調査しなかったが, 当時は, まだ, まれにしか, 進行形が使用されていなかったと思われる。

1.4. 当時のこのような進行形の使用状況から判断しても——特に Wycliffe 自身の著作による作品の進行形使用数と比較すると——Wycliffe の進行形使用数は、全く多過ぎる、と言わざるを得ない。

1.5. このような異常な Wycliffe における進行形使用は、ラテン語に影響された結果であることが、次の調査から明らかである。

Wycliffe は、ラテン語訳聖書の Vulgate から英訳されているので、Wycliffe の進行形を、Vulgate のラテン語構造と比較してみた。その結果前者の進行形の部分は、すべて Vulgate では、「Sum+現在分詞」であることが分った。例を示すと、

(1) (W) For he *was havynge* many possession. *Matt.* 19, 22.

(V) … *erat enim havens* multas possessions. *Ibid.*

(2) (W) And Jhesu him self *was bygynnyng*e … *Luke* 3, 23.

(V) Et ipse Jesus *erat incipiens* … *Ibid.*

(3) (W) … now from this tyme thou *schalt be takynge* men.

*Luke* 5, 10.

(V) … *ex hoc jam homines eris capiens*. *Ibid.*

しかし、Vulgate の「Sum+現在分詞」のすべては、Wycliffe で、「Be+現在分詞」に、なっているわけではない。<sup>3)</sup>

1.6. 以上の事実から Wycliffe の進行形は、ラテン語構造「Sum+現在分詞」の、相当、機械的な訳から、来たものである、と言える。しかし、聖書という性格上、Wycliffe の進行形は、その後の進行形使用を促すのに、大いに貢献したものと思われる。

(尚、Wycliffe の進行形のくわしい状況は、表 2 に示してある。)

表2 Wycliffe (四福音書) の進行形

進行形数	45
現在	3
過去	37
shall/will—	5
have	2
abide	3
dwelt	1
rest	1
go	1
enter	1
begin	1
behold	1
believe	1
wonder	1
teach	5
pray	3
baptize	4
preach	2
cry	1
speak	2
他の Verb of Motion 他の Stative Verb	13
	2

## 2. 近代英訳聖書における進行形

2.0. 表3は、各近代英訳聖書における、進行形使用数を表わしている。この表3の各英訳聖書における進行形使用数からは、次の点が、明らかになる。

(1) *Tyndale 25* (1525) が出来てから、*New.* が出るまでの445年間に進行形は、約28.4倍に増大している。

表3

<i>Tyndale 25</i>	<i>Tyndale 34</i>	<i>Geneva</i>	<i>Auth.</i>	<i>Purver</i>	<i>Revised</i>	<i>Moffatt</i>	<i>New.</i>	近代英訳聖書 (新約聖書)
1525	1534	1560	1611	1764	1881	1913	1970	年代
23	22	27	51	178	203	533	655	計
4	2	4	9	63	36	300	344	現在
15	16	21	39	105	160	202	264	過去
0	0	0	0	2	0	9	10	現在完了
0	0	0	0	2	0	5	13	過去完了
2	2	2	2	3	3	7	12	未来(shall/will—)
1	1	0	0	0	0	0	0	命令構造
1	1	0	1	3	4	10	12	shall/will—以外の 不定詞構造
9	10	2	3	0	3	0	0	Be + a-ing
0	0	0	0	3	5	20	22	受動進行形
0	0	0	0	0	0	0	2	Be + being + 形容詞

(2) 進行形の増加率は、*Purver* が最も高く（約3.5倍）、進行形は、主として、後期近代英語期になって、著しく発達したと言えよう。

2.1.0. 次に、表3を中心に、進行形の発達を、その形態別に見ることとする。

### 2.1.1. 現在進行形と過去進行形

図 1

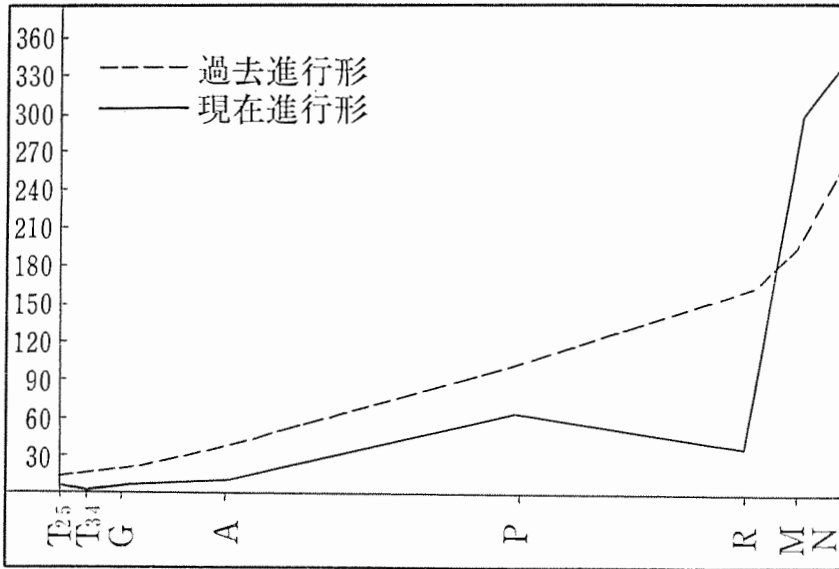


図1は、表3の、各英訳聖書における現在進行形と過去進行形の使用数を、グラフで表わしたものである。

この図では、*Revised* の現在進行形使用数は、その117年前に出た *Purver* の現在進行形使用数よりも、少くなっている。この原因は、*The Books Called Apocrypha. The Revised Version*. London (Cambridge U.P.), 1929. の Preface, p. vi. に “In regard to the revision of the Version especial care was taken to preserve the general tone of the Authorized Version....” とあるように、*Auth.* の文体を、できるだけ踏襲しよ

うとした *Revised* の編集方針によるものと思われる。*Revised* における、このような文体の保守性は、他の形態の進行形使用にも影響を及ぼしていることが、表3から分る。(一方このような事実にもかかわらず、過去進行形は、わずかではあるが、*Purver* よりも増加している。)

以上の事実を考慮すると、現在進行形は、後期近代英語期、特に18c.~19c.の間に、急速な発達をしたと言える。一方、過去進行形は、初期近代英語期から、相当発達している。

現在進行形と過去進行形の発達の主な原因としては、初期の時代に、単純形によって表わされていた「進行・継続中」の意味が、進行形によって表わされるようになってきたことが、挙げられる。

(1) (T25&T34) And anone as he *went* on his waye, ...*John* 4, 51.

(G) And as he *was now going* downe, ...*Ibid.*

(2) (G) ... as he *walked* in the Temple, ... *Mark* 11, 27.

(A) ... as he *was walking* in the Temple, ... *Ibid.*

(3) (A) What *question* ye with them? *Mark* 9, 16.

(P) What *are* you *disputing*? *Ibid.*

(4) (A) While hee yet *spake*, ... *Mark* 5, 35.

(P) While he *was speaking*, ... *Ibid.*

(5) (P) Now the Passage of Scripture which he *read* was this,  
... *Act.* 8, 32.

(R) Now the place of the scripture which he *was reading* was  
this, ... *Ibid.*

しかし、現在進行形が、18c.~19c.の間に急速に発達した原因は、上に述べたことと、同時に、2.2.5.1. で述べる、未来を表わす現在進行形の用法がこの時期に著しく発達したことが、大きく原因している。

2.1.2. 現在完了進行形も過去完了進行形も、*Purver* で、はじめて使用されている。

2.1.3. *will/shall* を伴った未来進行形は, *Tyndale 25* に, すでに使用されている。しかし, 現在進行形や過去進行形に比べて, あまり増加の傾向はない。

#### 2.1.4. 命令進行形

命令進行形は, *Lyndale 25* と *Tyndale 34* にのみ使用されている。

(T25 & T34) ... no man *be dwellynge* ... *Act.* 1, 20.

この *Tyndale 25* と *Tyndale 34* の命令進行形は, *Geneva* では, *Let* を用いた命令形になっている。(G) ... *let noman dwell* ... *Ibid.*

#### 2.1.5. 不定詞の進行形 (*will/shall+be+-ing* 以外)

不定詞の進行形は, *Geneva* を除くすべての近代英語聖書に見られる。この不定詞の進行形を, To-Infinitive と Root-Infinitive ((1) 法助動詞+*be+-ing* (2) その他) の進行形に分けて, 分布を見ると, 表4のようになる。

表4

不定詞の進行形		T25	T34	G	A	P	R	M	N
To-Infinitive の進行形		0	0	0	0	2	1	3	2
Root-Infinitive の 進 行 形	(1) 法助動詞+ <i>be+-ing</i>	0	0	0	0	1	1	5	10
	(2) その他 ( <i>Let~+be+-ing</i> のみ)	1	1	0	1	0	2	2	0

表4からは, 不定詞の進行形の内, Root-Infinitive の進行形 *let~+be+-ing* は, すでに *Tyndale 25* で使用されているが, 他の不定詞の進行形は *Purver* (1764) 以後に出た英訳聖書にしか見られない。

##### 2.1.5.1. To-Infinitive の進行形

To-Infinitive の進行形は, 英訳聖書においては, 次の四つの構文で, 使用されている。

(1) *To appear to be-ing* (3例). (P: *Matt.* 6, 16 & 6, 18/M: *1 Corinthians* 14, 2.) e. g.



(P) ... they may *appear to be fasting*. *Matt.* 6, 16.

(2) *To be found to be-ing* (1例).

(R) ... lest haply ye *be found to be fighting* against God. *Act.* 5, 4.

(3) *To claim to be-ing*. (2例). (N: *1 John* 1, 6. & 2, 6.) e. g.

(N) If we *claim to be sharing* in his life ... *1 John* 1, 6.

(4) *It is* ... *to be-ing* (2例). (M: *Philippians* 1, 3. & *2 Corinthians* 9, 1.) e. g. (M) *It is* only natural for me *to be thinking* of you ... *Philippians* 1, 3.

#### 2.1.5.2.0. Root-Infinitive の進行形

##### 2.1.5.2.1. 法助動詞+be+ing

進行形と共起している法助動詞の種類と、その分布は、表5に示されている。

表5

	P	R	M	N
<i>can</i>	0	0	0	2
<i>could</i>	0	0	0	1
<i>ought to</i>	0	0	2	1
<i>must</i>	0	0	1	0
<i>may</i>	1	0	0	0
<i>should</i>	0	1	1	3
<i>would</i>	0	0	1	3

[例を示すと:(N)... whom *could he be speaking of?* *John* 13, 22./ (N) What *can this charlatan be trying* to say? *Act.* 17, 18./ (M) ... he who says he 'remains in him' *ought to be living* as he lived. *1 John* 2, 5./ (M) ... you *must be following* his footsteps. *1 Peter* 1, 21/(R)... lest by any means I *should be running*. *Galathians* 2, 2./ (N) If I did it, my followers *would be fighting* to save me ... *John* 18, 36.]

これらの法助動詞と結びついた進行形の中で、一例だけ、さらに完了形と結びついた例が、*Moffatt*に見られた。(4) (M) ... they *would long ago have been sitting penitent*...*Luke* 10, 5.

##### 2.1.5.2.2. その他の Root-Infinitive の進行形—Let~+be+ing.

その他の Root-Infinitive の進行形の例は、Let~+be+ing. の形しか

みられない。この進行形は、(T25 & T34) ... *let vs be goinge* ... *Matt. 26. 46.* のように、皆、*go* の進行形である。*Geneva, Purver, New.* では、この進行形は、使用されておらず、(N) ... *let us go* ... *Matt. 26. 46.* のように単純形になっている。

### 2.1.6.0. *Be+a-ing*

進行形の起原については、OE の「*Be*+現在分詞」に由来し、ME の「*Be*+*on* (or *in*) +動名詞」と合流したという説が、今日、最も有力である。後者の前置詞 *on* は、reduce して *a* となり、*in* もこの analogy により、*a* となった。この *a* は、無音化、脱落してしまった。*Be+a-ing* の形は、このような過程の中で、できた mid-form である。英訳聖書においては、この形は、*Tyndale 34* (1534) において頂点に達し、*Geneva* (1560) で急に減少している。

この形は、表 6 が、示すように、しばしば受動の意味を持っている。

表 6

<i>Be+a-ing</i>	T25	T34	G	A	P	R	M	N
受動の意味	4	5	1	2	0	2	0	0
能動の意味	5	5	1	1	0	1	0	0

受動の意味を表わしている場合の動詞は、次の四つである。

- (1) *To be a building* [T34 & G: *John* 2, 20.]
- (2) *To be a doing* [T25 & T34: *John* 8, 4. *Colossians* 4, 9.]
- (3) *To be a burning* (or *brenynge*) [T25 & T34: *Luke* 1, 10.]
- (4) *To be a preparing* [T25, T34, A&R: *1 Peter* 3, 20.]

能動の意味を表わしているのは、次の五つの動詞である。

- (1) *To be a coming* [T25, T34, A, & R: *Luke* 9, 42.]
- (2) *To be a casting* [T25, & T34: *Luke* 11, 14.]
- (3) *To be a loosing* [T25, & T34: *Luke* 19, 33.]

(4) To *be a dying* [T25, T34, G, A, & R: *Hebrew* 11, 21.]

(5) To *be a grinding* [T25, & T34: *Luke* 17, 35.]

受動の意味を表わしている *Be+a-ing* は, *a* が脱落した後も, *Be+ing* のままで, ずっと残っている例はみられず, 次の例が示すように, 皆, 別の構文によって Paraphrase されている。

(1) [c. f. (T25)…Xlvi yeares this temple wasbilt…*John* 2, 20.]

(T34)…Xlvi yeares *was* this temple *abuilding*…*Ibid.*

(G)…Fortie and six yeres *was* this temple *a building*…*Ibid.*

(A)…Fourty and six years *was* this temple *in builing*…*Ibid.*

(P)…Forty and six Years this Temple *has been building*…*Ibid.*

(R)…Forty and six years *was* this temple *in building*…*Ibid.*

(M)…This sanctuary took forty-six years *to build*…*Ibid.*

(N)…It has taken forty-six years *to build* this temple…*Ibid.*

(2) (T25 & T34) …even the deed *was a doynge*. *John* 8, 4.

(G)…*in the verie act*. *Ibid.*

(3) (T25 & 54) …whyll the arcke *was a preparinge*…*I. Peter* 3, 20..

(G)…while the ark *was preparing*…*Ibid.*

(A)…while the Arke *was a preparing*…*Ibid.*

(P)…when the Ark *was making* ready…*Ibid.*

(R)…while the ark *was a preparing*…*Ibid.*

(M)…during *the construction* of the ark…*Ibid.*

#### 2.1.6.1.

*Tyndale 25* と, *Tyndale 34* においては, 受動の意味を表わす場合は, 皆, *Be+a-ing* の形であり, 受動の意味を表わす場合の進行形の起源は, 「*Be+on* (or *in*) +動名詞」であることを暗示している。<sup>5)</sup>

#### 2.1.7. 受動進行形 (*Be+being*+過去分詞)

上の調査からも分るように、意味上、受動を表わす進行形は、今世紀に近づく程、あまり好まれなくなっている。これは、一般に言われているように、形態と、それが表わす意味との不一致、という不合理性に起因している。この理由により、18c. に、「*Be + being + 過去分詞*」の形態を持つ受動進行形が現われた、といわれている。英訳聖書においても、18c. の *Purver* (1764) に、はじめてこの受動進行形が使用されている。

e. g.

(P) Eloi, Eloi, lam sabachthani, that *is being interpreted*, My God, my God, for what hast thou forsaken me? *Mark* 15, 34.

#### 2.1.7. *Be + being + 形容詞*

この進行形は、*New.* に、はじめて使用されている。

e. g.

(N) "My friend, I *am not being unfair* to you..." *Mark* 20, 14.

#### 2.2.0.

次に、近代英訳聖書における進行形の発達を、進行形を含む英語構造の面から見ることにする。

#### 2.2.1.

表7は、進行形の現われる英語構造を、主節と従節に分けて、各英訳聖書におけるそれらの分布を示したものである。

表7

	T25	T34	G	A	P	R	M	N
従節中の進行形	15	13	17	28	107	116	310	394
(パーセント)	(65)	(60)	(63)	(53)	(60)	(58)	(56)	(60)

この表からは、各近代英訳聖書の進行形の半数以上が、従節中に使用されていることが分る。

この従節を、名詞節、形容詞節、副詞節に分け、各英訳聖書における、それぞれの百分比を、グラフで表わしたのが、図2である。

図 2

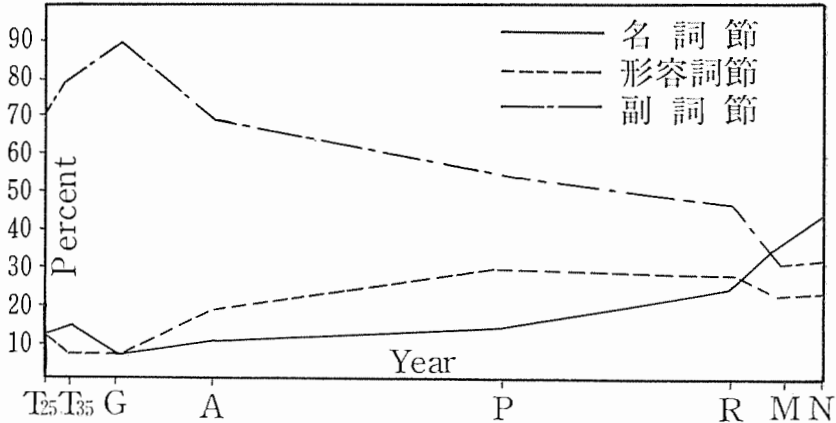


図2からは、次の点が明らかになる。

(1) 初期近代英訳聖書では、進行形を含む従節の内、副詞節の占める割合が、圧倒的に多い(90~70%)が、後期近代英訳聖書では、次第に少なくなってきて、20c.では、副詞節の占める割合が、一番少くなっている(32~33%)。(英訳聖書では、ほとんどの副詞節は、*as/when/while*-clauseである。(副詞節の内、この種の副詞節の占める割合は、T<sub>25</sub>: 91%, T<sub>34</sub>: 100%, G: 100%, A: 100%, P: 93%, M: 68%, N: 60%である。)

(2) 形容詞節は、*Auth.* と *Purver* で、占める割合が、わずかに増加しているが20c.では、一番少くなっている。(英訳聖書では、形容詞節は、すべて関係節である。)

(3) 名詞節の占める割合は、*Geneva~Revised* の英訳聖書では、一番少ないが、しかし、この間にも、増加の傾向を見せ、20c.の英訳聖書では、一番多くなっている。

## 2.2.1.1.

進行形を含む名詞節の種類を調べるために、名詞節を次の二つに大きく分けてみた。

(1) perception, inert cognition, 又は psychological state を表わす動詞, 名詞, 形容詞の目的節, あるいは, 同格節。e.g. to *know* (*that*) ..., *recognize* (*that*) ..., *suppose* (*that*)..., *remember* (*that*)..., *see* (*that*) ..., *hear* (*that*) ..., *rejoice* (*that*) ..., *be astonished* (*that*)..., *the idea* (*that*)...etc.

(2) その他の名詞節

表8は、上で分類した二種類の名詞節の分布を表わしている。

表8

	T25	T34	G	A	P	R	M	N
分類(1)の名詞節	1	1	1	2	15	20	97	124
その他の名詞節	1	1	0	1	1	10	39	48

この表からは、名詞節が、後期近代英訳聖書において増加している原因は、主として従節中に descriptive な叙述を好む傾向にある分類(1)の名詞節に、進行形が多く使用されるようになったためである、ということが分る。

## 2.2.2. 否定文と疑問文の進行形

表9と表10は、それぞれ、否定文と疑問文の進行形の分布を表わしている。

表9

否定文の進行形	T25	T34	G	A	P	R	M	N
計	0	0	0	0	1	1	20	21
* 現在進行形	—	—	—	—	1	0	18	19
過去進行形	—	—	—	—	0	1	2	2

\* Pに *may*, MとNに *ought to* と共起している否定文の進行形を一例ずつ含む。

表10疑

問文の進行形	T25	T34	G	A	P	R	M	N
計	0	0	0	0	1	3	31	33
現在進行形	—	—	—	—	1	2	30	32
過去進行形	—	—	—	—	0	1	1	1

疑問文の進行形と否定文の進行形は、同じく *Purver* に、はじめて使用されている。又、両方共、現在時制以外の時制では、ほとんどみられない。尚、疑問文の進行形には、*why* に導びかれている例が、多いのが特徴である。(P: 0, M:17, N:20.)

### 2.2.3. Temporal adverbials と進行形

英訳聖書において、temporal adverbial(s) と共に使用されている進行形は、temporal adverbial(s) の種類によって、次の三つに分けられる。

(1) 時の接続詞 *as/when/while/etc.*—clause—中の進行形、(同時に、時を示す副詞・副詞句—adjunct(s)—を伴う場合も含む。)

(2) 時の接続詞 *as /when / while/etc.*—clause の主節中の進行形(同時に、時の adjunct(s)を伴う場合も含む。)

(3) 時を表わす adjunct(s) (頻度を表わす adjuncts も含む) のみと共起する進行形、

表11は、上の分類に基づいて、temporal adverbial (s) と共に使用されている進行形の分布を、示したものである。

この表からは、temporal adverbial(s) と共に使用されている進行形の例は、16c.～17c.の各英訳聖書では、総進行形使用数の半数以上を占めている。しかし、17c.以後の英訳聖書では、次第に少くなっており、18c.以後の英訳聖書では、半数以下になっている。16c.～18c.の各英訳聖書では、これらの進行形の大部分は、*as/when/while*—clause 中、あるいは、*as/when/while*—clause の主節中に使用されている。しかし、19c.以後の各英訳聖書では、時を表わす

表11

	T25	T34	G	A	P	R	M	N
* 1. (1) <i>at/when/while/etc.</i> —clause 中の進行形	10	10	15	20	54	48	68	75
* 2. (2) <i>as/when/while/etc.</i> —clause 中の主節中の進行形	1	2	3	3	4	7	19	33
(3) 時の adjunct(s) のみと共起する進行形	1	1	3	5	19	32	72	118
計	12	13	21	28	77	87	159	226
(総進行形使用数に対するパーセント)	(52)	(59)	(78)	(55)	(43)	(43)	(30)	(35)

\* 1. *as/when/while*—clause 以外に, *since/so long as/until/now that*—clause 中の進行形の例が *New.* に一例ずつある。

\* 2. *as/when/while*—clause の主節以外に, *before*—clause の主節中の進行形の例が *Moffatt* に一例ある。

adjunct(s) のみと共起している進行形の増加が著しくなっている。

[*as/when/while*—clause 中, 又は, その主節中に使用されている進行形は, *still, yet, now, etc.* の時の adjuncts を伴っている例もあるが, このような例は, 少数である。— T25 : 2, T34 : 2, G : 6, A : 6, P : 7, R : 8, M : 19, N : 19.]

2.2.3.1. *as/when/while*—clause, 又は, その主節中に使用されている進行形のほとんどは, 二つの事柄が同時に「進行, 継続」している事 (Simultaneousness) を表わしている。又, 非常にまれであるが, 二つの事柄が「同じ事」(Equality) を表わしている場合もある。Simultaneousness を表わしている場合には, 時の枠を示す *as/when/while*—clause 中に, 進行形が, そして, その主節中に単純形が, 使用されている場合が多い。逆の場合の例は, 上の表から分るように, 非常に少ない。尚, この場合, 主節と従節の両方に, 進行形が使用されている場合は, ごくまれで, *Purver* と *New.* に, 各一例ずつ見られるだけである。その例を示すと :

(P) ... he *was teaching*, when the Pharisees and Teachers of Law *were sitting*. *I Corinthians* 14, 2.



(N) While Peter *was* still *puzzling* over ..., the messengers of Cornelius *had been asking* the way to Simon's house,...

Act. 10, 17.

Simultaneousness を表わす場合と, Equality を表わす場合との差は, 微妙であるが, 後者の場合にも, 一例, 主節と従節の両方に, 進行形が使用されている例がある。

(N) When a man *is using* the language of ecstasy he *is talking* with God,...

I Corinthians 14, 2.

[c. f. (M) For he who speaks in a 'tongue' addresses God, ...Ibid.]

2.2.3.2. 表12は, 時を示す adjunct(s) (frequency or regularity を表わすものもここでは含める) とのみ共起している進行形を, その adjuncts の表わす意味によって分類したものである。

表12

		T	25	T	34	G	A	P	R	M	N
(1) point of time	計	0	0	0	1	5	10	25	29		
	now				1	5	9	8	23		
	then				0	0	0	4	5		
	その他				0	0	1	13	1		
(2) length of time		1	2	2	2	4	1	15	23		
(3) frequency or regularity	計	0	0	1	0	3	6	7	18		
	ever			1		0	0	0	0		
	for ever			0		0	0	0	1		
	always			0		0	2	2	6		
	constantly			0		0	0	0	3		
	continally			0		0	0	0	1		
	daily/every day			0		1	2	1	0		
	today and tomorrow			0		0	0	0	2		
	all over again			0		0	0	0	3		
again			0		1	2	4	1			
(4) (1). (2). (3) 以外の time-adjunct	計	0	0	0	2	8	15	23	49		
still					0	0	2	1	7		
already					0	0	0	4	2		
yet					0	0	0	1	0		
just					0	0	0	1	0		
at once					0	0	0	1	1		
before long/soon/shortly					0	0	0	1	3		
immediately					0	0	0	0	1		
その他漠然と時を示すもの					2	8	13	19	35		

この表からは, length of time を表わす adjunct と共起している進行形は, すでに *Tyndale 25* に見られる。

*Tyndale 25* (および, *Tyndale 34*) の例は,

(T25 & T34) ...we which live and *are remayninge in the comminge* of the Lorde shall not come yrre they which slepe.

*1 Thessalonians 4, 15.*

(c.f. *in the comminge of* = until the comming of)

又, frequency or regularity を表わす adjunct と共起している進行形は, *Geneva* ではじめて, 一例見られる。しかし, 主として, *Purver* 以後に見られるようになる。*Geneva* の例は:

(G) ...which women *are euer learning* ... *2 Timothy 3, 6~7.*

その他の adjunct のみと共起している進行形の例は, *Auth.* 以後の英訳聖書でない, 見られない。

### 2.2.3.3.

temporal adverbial(s) と共に使用されている進行形を, 時制別に分けて, それらの各英訳聖書における分布を表わしたのが, 表13である。

表13

Temporal Adverbials と共に使用されている進行形	T25	T34	G	A	P	R	M	N
現在進行形 (%)	1 (25)	1 (50)	2 (50)	1 (11)	5 (8)	9 (25)	56 (19)	78 (23)
過去進行形 (%)	11 (73)	12 (75)	19 (90)	27 (69)	68 (65)	77 (46)	91 (45)	132 (50)
その他の進行形 (%)	0	0	0	0	4 (40)	1 (17)	12 (39)	16 (34)

この表からは, 現在進行形は, temporal adverbial(s) と共に使用されている場合が, 少ないことが分る。これは, 一つには, 現在進行形は, 話者が発

話している「時」を中心に、事柄が「進行・継続中」であることを表わしている場合が多くあり、この場合には、特に、「時」を specify する必要がない、ということが原因しているように思われる。例えば：

(G) Behold, the men that ye put in prison, *are standing* in the temple, ... Act. 5, 25.

尚、現在進行形と共に使用されている temporal adverbial(s) の種類には、特徴が見られない。

一方、過去進行形は、何らかの形で、「時」を specify されている例が多い。尚、過去進行形と共に用いられている temporal adverbial(s) の種類には、「時」の枠を示す *as/when/while*-clause が、各英訳聖書において、非常に多いのが特徴である。—T25 : 90%, T34 : 92%, G : 89%, A : 81%, P : 79%, R : 77%, M : 76%, N : 64%。

### 2.2.5. 進行形の意味

進行形の基本的な意味については、Mossé<sup>6)</sup> と Curme<sup>7)</sup> は “durée” (or “duration”), Bodersen<sup>8)</sup> は, “actions themselves”, Hatcher<sup>9)</sup> は, “overt action” を表わす、といている。いずれの学者の意見も、進行形は、dynamic な「動作」を表わすという点では、一致しているように思われる。ここでは、各英訳聖書の個々の表現を、比較することにより、明らかとなる進行形の二次的な意味を調べる。

#### 2.2.5.1. 未 来

進行形は、future sphere を指すことができる。例えば：

(1) (T25 & T34)…we which live and *are remayninge* in the com-  
minge of the Lorde shall not come yrre they which slepe.

*1 Thessalonians 4, 15.*

(P)…we who *shall be left* alive till his coming…*Ibid.*

(2) (T25 & T34)…*I am about to come*…*John 5, 7.*

(G)…*I am coming*…*Ibid.*

(3) (M) And I *will send* down on you what my Father has promised;…  
*Luke* 24, 49.

(N) I *am sending* upon you my Father's promised gift;…

*Ibid.*

(4) (M)…everything that *was to happen* to him, …*John*. 18, 4.

(N)…all that *was coming* upon him, …*Ibid.*

表14は、未来を表わしている進行形の、各英訳聖書における分布を、示している。

表14

	T25	T34	G	A	P	R	M	N
現在進行形	2	1	2	8	37	12	76	107
(総現在進行形使用数に対するパーセント)	(50)	(50)	(50)	(88)	(57)	(33)	(24)	(30)
過去進行形	1	1	1	3	13	9	18	19
その他の時制の進行形	0	0	0	0	0	0	0	0
計	3	2	3	11	50	21	94	126

この表からは、未来を表わす進行形使用数は、*Purver* (1764) において、急に増加しており、*Auth.* の約4.6倍になっている。又、この進行形は、現在時制で使用されている例が、他の時制に比べて非常に多い。

尚、現在進行形は、表3において、*Purver*、あるいは、それ以後の英訳聖書で急速な増加を示していたが、これは、未来を表わす現在進行形が、*Purver* あるいは、それ以後の英訳聖書で、著しく発達したことが、大きく原因していることも、表14からわかる。さらに、*Revised* の現在進行形が、その前に出た *Purver* よりも少くなっているのも、*Revised* の文体の保守性のために、未来を表わす現在進行形が、*Revised* にはあまり使用されなかったことが、大きな原因であることが分る。

## 2.2.5.2. 反 復

進行形が、反復を表わすことは、次の例によって、明らかである。

(1) (A) And the disciples of John and Pharisees *vst to fast*.

*Mark* 1, 8.

(R) And John's disciples and Pharisees *were fasting*. *Ibid*.

(2) (R)…he *was crying* out, and *cutting himself* with stones.

*Mark* 5, 5.

(N)…he *would cry* aloud… and *cut himself* with stones. *Ibid*.

又, *ever, always, constantly, etc.* の反復を表わす adjunct(s) を伴った進行形は、その adjunct(s) の意味から、当然、反復を表わす。Van Der Laan<sup>10)</sup> によれば、このような進行形は、'indignation, annoyance, admiration and <sup>the</sup>like' を表わす。英訳聖書においても、この事実が、はっきり分る例がある：

(G)…simple women laden with sinnes, and led with diuers

lustes, <sup>with</sup> which women *are euer learning*,…2 *Timothy* 3, 6-7.

(M)…women-folk who feel crushed by the burden of their sins

—wayward creatures of impulse, *always curious to <sup>be</sup>learn*…

*Ibid*.

(N)…women burdened with a sinful past, and led on by all kinds

of desires, who *are always wanting to be taught*…*Ibid*.

この例では、*Geneva* の…*are euer learning*…が持つ感情色彩が、後の二つの英訳聖書では、強張されている。

さらに、point-action verb は、進行形になると、必然的に、反復を表わす。なぜならば、進行形は、時間を伴った「動作」を表わすからである。

e. g.

(P) The Stars of Heaven *will be falling*,…*Mark* 13, 25.

(M) For we *haue all been receiving* grace after grace *John* 1, 16.

### 2.2.5.3 起 動

Ingressive function は、普通、to *begin to*..., to *start to*..., etc. によって表わされるが、この機能が、進行形にも、与えられていることが、次の例により、明らかである。

(1) (A)...they *began to sink*. *Luke* 5, 7.

(P)...they *were sinking*. *Ibid.*

(2) (M)...they *started to run*...*John* 20, 4.

(N)...they *were run<sup>ing</sup>*...*Ibid.*

しかし、動詞の lexical meaning によって、起動の意味を表わすものもある。

(R) *Are we beginning to commend ourselves?* *2 Corinthian*

53, 1.

(N) This is a lonely place and it *is getting late*...*Mark* 6, 36.

2.2.5.4. Simultaneousness と Equality については、すでに、2.2.3.1. で言及した。

### 2.2.6. 一般に進行形使用がまれな動詞の進行形

static idea, duration (or continuity), psychological state, あるいは perception (e.g. *see, hear*) を表わす動詞の進行形使用は、一般にまれである。これは、進行形が、dynamic な「動作」に重きを置く表現手段であるからである。

表15と16は、各英訳聖書における、このような動詞の進行形の分布を表わしている。

表15 VERBS OF PERCEPTION OR PSYCHOLOGICAL STATE

	T25	T34	G	A	P	R	M	N
(1) hear					1			2
(2) see								2
(3) think					2		6	6
(4) ponder							1	
(5) believe							1	
(6) recall								2
(7) expect							4	5
(8) want								4
(9) long								1
(10) hope							1	3
(11) anticipate							1	
(12) thank								2
(13) honour								1
(14) worship							2	
(15) wonder							1	2
(16) lament								1
(17) mourn							1	
(18) please						1		
(19) condole							1	
(20) tolerate							1	
(21) look forward to								2
Total	0	0	0	0	3	1	20	33

これらの表によると、psychological state,あるいは、perceptionを表わす動詞の進行形は、*Purver* 以後の後期近代英訳聖書にしか、みられない。し

かし、その他の、static idea、あるいは、duration (or continuity) を表わす動詞の進行形は、すでに初期近代英訳聖書においてもみられる。

これらの動詞の進行形と、単純形との差は、非常に微妙である。この差について、R. W. Zandvoort は、次のように言っている：

‘The verbal-adjectival character of the present participle makes

表16                      その他の、duration を表わす動詞

	T25	T34	G	A	P	R	M	N
(1) want (=lack)					1			
(2) become (=benefit)					3			
(3) belong	1							
(4) stand	2	2	2	3	6	10	19	17
(5) lie				1	1		7	8
(6) sit				2	10	11	5	12
(7) remain	1	1	1	1	1			
(8) dwell	1	1	1	1		1		
(9) stay							5	4
(10) live							9	9
(11) abide						1		
(12) lodge						1		4
(13) hold								1
(14) rest							1	1
(15) wear								1
(16) *be								2
(17) keep						2	2	5
Total	5	4	4	8	22	26	48	64

\* 受動進行形「be+being+過去分詞」の be+being は含まれていない。



the progressive more descriptive here than the purely verbal character of the simple form.’<sup>11)</sup>

例を示すと：(N) Turning to his disciples in private he said, ‘Happy the eyes that see what you *are seeing!* Luke 10, 24. / (N) Startled and terrified, they thought that they *were seeing* a ghost. Luke 11, 29/ (N) And yet you *are holding* fast to my cause. Revelation 2, 13.

しかし、初期近代英訳聖書では、この種の動詞の進行形使用に、迷いがあった、と思われる例も見られる。たとえば、次に示す Tyndale の英訳聖書の初版では、*belong* の進行形が使用されているが、その改訂版では、単純形に直されている。

(T25)…because ye *are belonginge* to Christe…Mark 9, 41.

(T34)…because ye *belonge* to Christe…*Ibid.*

3.0. これまでの *Wycliffe* 以後の英訳聖書という限られた資料の調査から、進行形の変遷について、帰納できるものを述べる。

a. 後期中世英語ではまだ、まれにしか進行形が、使用されていなかったと思われる。*Wycliffe* に見られる、当時としては、多すぎる進行形使用は、*Wycliffe* が訳した Vulgate の「*Sum*+現在分詞」の影響によるものである。

b. 進行形は、近代英語期に著しく発達した。これは、初期近代英語期に出た *Tyndale 25* (1525) から、今日の *New.* (1970) が出るまでの445年の間に進行形使用数が、約28.4倍にも増大していることで明らかである。進行形の使用は今後も増大するように思われる。又、「*Be+being*+形容詞」以外の、今日見られるあらゆる形態の進行形が、*Purver*(1764) で使用されていることから、進行形が、今日のように自由に使用されはじめた時期が、うかがえる。

c. 進行形が使用される時制は、主として、現在時制と過去時制である。現在進行形は、後期近代英語期に、急速な発達を示した。これは、未来を表わす現在進行形の用法が、後期近代英語期に、著しく発達したことが、大きく原因

している。一方、過去進行形は、初期近代英語期から、今日に至るまでの間に、着々と発達してきている。

d. 近代英訳聖書においては、進行形使用数の半数以上が、従節中に使用されたものである。この従節の中で、初期近代英訳聖書では、副詞節（大部分は、*as/when/while*-clause）が圧倒的に多いが、後期近代英訳聖書においては、名詞節（特に、*perception* あるいは、*psychological state* を表わす名詞、動詞、又は形容詞の目的節あるいは、同格節）の増加が著しい。

e. 否定文と疑問文の進行形は、比較的最近、使用され始め、主として、現在時制が多く使用されている。

f. *temporal adverbial(s)* と共に使用されている進行形は、近代英語期の前期には多く、後期には少ないという傾向が見られる。又、一般的に、現在進行形は、*temporal adverbials* と共に使用される場合は少ないが、過去進行形は、*temporal adverbials* と共に使用されることが多い、という傾向も見られる。

g. 一般に、進行形使用が、まれな動詞の内、*perception* あるいは、*psychological state* を表わす動詞の進行形は、近代英語期の後期に見られるようになるが、その他の動詞は、前期からすでにみられる。

〔注〕

- 1) F. Mossé. *Histoire de la forme périphrastique être & participe présent en Germanique*. 2 vols. Paris, 1938.
- 2) F. Mossé (*op. cit.*, vol. 1. pp. 32~33) が、調査した texts の中で、彼は、*Maundeville* に 27例、*Confession Amantis* に 23例みつけている。又、A. Åkerlund (*On the History of the Definite Tenses in English*, Lund, 1911. pp. 34~35) が、調査した texts の中で、彼は、*Havelok the Dane* (3000 short lines) に 1例、*Sir Gawayne and the Green Knight* に 1例、*Early English Alliterative Poems* に 1例みつけている。
- 3) 例を示すと：
  - a. (V) …qui cum illis erant discumbertes. *Luke* 5, 25.
  - (W) And of others that were with hem, *sittinge* at the mete. *Ibid.*

- b. (V)…*eris potestatem habens super decem civitates. Luke 19, 17.*  
 (W)…*thou shalt have power on ten cities. Ibid.*
- c. (V)…*quia inde erat transiturus. Luke 19, 4.*  
 (W)…*for he was to passinge thennis. Ibid.*
- 4) F. Mossé (*op. cit.*, p.133) は、この結合については、可能だが、例は、見つけられなかったと、言っている。
- 5) F. Mossé (*op. cit.*, p.118.) は、present participle は、態に対して本質的に、中性であるから、受動の意味を表わす進行形の起源として、「Be + 前置詞 + 動名詞」を考える必要がない、と言っている。一方、Jespersen (*A Modern English Grammar on Historical Principles*, London, 1965, Vol.IV. pp. 205~214.) は、この場合の進行形の起源は、「Be + 前置詞 + 動名詞」であると主張している。
- 6) F. Mossé, *op. cit.*,
- 7) G. O. Curme, "Development of the Progressive Form in Germanic," *PMLA*, XVIII (1913), pp.159~178.
- 8) C. A. Bodersen, "The Expanded Tenses in Modern English. An Attempt at an Explanation," *Englische Studien*, vol.71 (1937), pp. 220~238
- 9) A. G. Hatcher, "The Use of the Progressive Form in English: A New Approach," *Language*, vol.27 (1951), pp. 254~280.
- 10) J. Von Der Laan, *An Enquiry on a Psychological Basis into the Use of the Progressive Form in Late Modern English*. Amsterdam, 1922, p.31.
- 11) R. W. Zandvoort, *A Handbook of English Grammar*. London, 1969, pp. 38~39.